

学校と地域をむすぶ

大津市立葛川小・中学校

地域コーディネーターだより

2016. 3. 25

NO. 7

# かけはし

## 昔の暮らし 発見



3・4年生が「かやぶきの家」に行ったのは、まだ白い銀世界につつまれていた2月。澤井栄子さんにお話を聞きながらいろいろな体験をさせていただきました。

まずは、朝一番、雨戸を開けるところから。どうやったら鍵があくのだろう？ 戸袋に全部の雨戸をしまうには？ 雨戸を開けると家の中が明るくなりました。

次の仕事は「火おこし」です。昔は生活に欠かすことのできない火をおこすことが、朝一番の大事な仕事だったという話を聞きました。いろりに杉葉や木の枝、薪を持ってきて、火をおこしてたきつけます。火吹き竹でフーフー息を入れて火を大きくします。白い煙で目が痛くなりましたが、火が消えてしまわないよう、しっかりと燃えるように頑張りました。

「とちへし」という道具を使って栃の実の皮のむき方を教えてもらいました。固い栃の実の皮は包丁でむくのは大変です。「とちへし」の間に栃の実をはさみ、木の板をずらしながら力を入れます。コツをつかむと上手に皮がくるとむけました。たくさんの栃の実の皮を次々とむいていきました。皮をむいた栃の実は、灰を使って灰汁抜きをしなければな



らないという大変な手間も知りました。それを使ってできたのが栃餅。どんな味なんだろう？ 焼いていただくことになりました。焼く道具は火鉢です。いろりでいこった炭を火鉢に運びます。網の上においた栃餅から香ばしいにおいを放たれてきました。焼きたての栃餅。白いお餅とはまた違った味を楽しみました。

いろりの火のもりをしながら、いろりやかやぶき、昔の暮らしの話を聞きました。あの煙たかった煙は上に上っていきますが、その後はどうなるのだろう？ 外に出て屋根を見てみると、屋根の横から煙が出ていました。この煙は屋根を葺いている「かや」の中の虫を退治してくれるということも知りました。

「かやぶきの家」にあるたくさんの道具も見せてもらいました。小野容子さんは、この日「糸車」を持ってきてくださいました。後日学校で糸車を回しながらお話を聞きました。とても気になっていた大きなおなべ。「おくどさん」と言われてとても大事にされていたのです。足ごたつは、中に炭を入れて使うこと。行燈は、ろうそくを立てて使うものと、お皿の上に油をたらして使うものの2種類あったこと。大きな歯の「木挽き鋸」は太い木を平らな断面にするために使われていたこと。わらで作ったものがたくさんあることにも気づきました。コードのないアイロンも中に炭を入れて使うそうです。お弁当箱は竹で作られていました。

昔はガスも電気もなく、今のようにスイッチ一つであかりをつけたり、ご飯を



炊いたり、あたたかくしたりということができなかつたけれども、いろいろな工夫があったのだと知りました。そこには、昔の人たちの生活の知恵があったのです。子どもたちも、水くみや薪運びなど家族としての大事な仕事をまかされていました。便利な世の中に暮らしている私たち。しかし、昔の人たちの生活の知恵を今一度考えてみるよい機会になりました。

この後、平の「杣の道」の見学に行きました。ここにも、いろりがあり、昔の道具や物がたくさんありました。いろりのまわりに置いてあった「円座」と呼ばれる座布団や、今ではあまり見なくなった「振り子時計」、「ランプ」などが目をひいたようです。ここでも、昔にタイムスリップしたように、昔生活を発見しました。



## 伝統を守り続けるために

1月に行われた「KTふれあいの輪」の懇話会で、葛川や久多の良い所は？ という問いかけに出されたたくさんの意見の中に、「歴史」や「伝統」というものがありました。その「歴史」や「伝統」の一つとしてあげられるのが、葛川の「太鼓廻し」と久多の「花笠踊」のお祭りです。3・4年生がこの二つのお祭りについて調べました。実際にお祭りに関わっておられる方々のお話を聞いてみたいということで、明王院の葛野常喜さん、葛川民芸保存会の中西仁史さん、そして久多自治振興会会長の岡田芳治さんにお話を聞かせていただきました。

葛野さんには、大雪の明王院を案内していただきながらお話を聞きました。明王院の歴史の深さや太鼓をまわす意味を教えてくださいました。実際に太鼓廻し



続けていくことは大変なことだけれども、今まで続けてきたことだからこそ、これからも守り続けていかなければいけないという思いを語っていただきました。

中西仁史さんは、葛川民芸保存会の方です。人がどんどん減っていく中で、太鼓のまわし手を絶やさないようにしてい

に使われる太鼓も見せていただき、近くで見てその大きさにびっくりしました。本堂の床にボコボコのあとがついているのは、太鼓をまわした時にできたものであることも知りました。お祭りを



くために、お祭りの1か月ほど前から行われる練習に力を入れておられます。中西さんも長年太鼓をまわし続けてこられたベテランのまわし手の一人です。重い大きな太鼓をまわすには練習を積み重ねなければなりません。修行に来られたお坊さんが太鼓の上から飛び降りるというシーンを作るためには、太鼓をまわす人



が必要です。「太鼓廻し」の運営に関わり、この太鼓をまわす人を作っていくことがとても大事なことであり、「みんなも中学生になったら太鼓をまわしてほしい」という熱い思いを語っていただきました。

久多に伝わる「花笠踊」。岡田さんからこのお祭りの歴史や、それにむけての準





備、当日の様子などを、映像を見せていただきながらお話をさせていただきました。各町ごとに作られる「花笠」は、それぞれ趣向がこらされ、とても細かい作業がほどこされています。人が減ってきていても、お祭りには欠かせないこの「花笠」を作るために、帰ってくる人もたくさんおられるそうです。このお祭りに欠かせ

ないもう一つのもの、それは「歌」だそうです。「室町小唄」をしのばせるこの歌も長年受け継がれてきたものの一つです。私たちには簡単にできそうに思えない「花笠」作り。しかし、岡田さんは、「花笠作りは見てたらできる。でも、歌はそう簡単なものではなく、とても難しい。だから、たくさん練習しなければいけない。」とおっしゃいます。毎年早くから、この歌の練習が行われているのだそうです。歌いながら、聞きながら、人から人へと伝えられていくこの「歌」。ここにも、このお祭りに対する熱い思いや、守り続けていきたいという強い願いがあるのだと思いました。



「太鼓廻し」と「花笠踊」の伝統的なお祭りの話を聞き、各地域に昔から伝えられてきたものを、絶やすことなく守り続けていくことは大変なことだけれども、それをこの先々伝えていくことが、地域や人々にとってとても大事なことであるということを感じました。

## 地域の中で 地域の方から 学ぶ

今年度も終わりを迎えようとしています。小中学生は、春から今日までの間にたくさんの地域の方々とふれあい、教えていただき、地域のことを知ることができました。

中学校の卒業式での卒業生の言葉の中に、「学校林の木はもう新しい芽を出しているのだろうか」「『KT ふれあいの輪』で、地域の方々とたくさん話ができたことがよかったです」「『かっざる』や『くたざる』のゆるキャラや、防災マップが誕生した『KT ふれあいの輪』を、これからも続けていってください」という言葉がありました。小学校の卒業式では、卒業生がそれぞれの将来の自分の夢を発表しました。たくさんの地域の方々からお話を聞いたり体験させていただいたことが、自分の将来を考えてみるきっかけになったように思えます。

地域の中に出向き、地域の方々に教えていただくことは、教科書だけでは学ぶことのできない貴重な学習になりました。「〇〇さんはこのことをよく知ってはるよ」「〇〇さんに聞いてみたいなあ」と、子どもたちの中から地域の方々のお名前が出てきます。外からはよく見ている郵便局や支所、自然の家などの施設。「中に何があるのかな?」「どんなお仕事をしてはるのかなあ」と、知りたいことを自分たちの目で確かめてみたくて見学もさせていただきました。

子どもたちは学校だけではなく、地域の中で学び育っているのだと、改めて地域と学校のつながりの大切さを感じた一年でした。これからも地域の皆様方にはお世話になりますが、よろしく願いいたします。そして、ありがとうございました。